

民俗学にとって「文化交流」研究とは何か 沖縄と中国の文化交流を事例として

What is “Cultural Exchange” Research in Folklore Studies?
An Example of Cultural Exchange
between the Ryukyu Kingdom and China

小熊 誠

- ①はじめに
- ②表層文化と基層文化
- ③文化の交流
- ④「文化交流」の視点と民俗学の新たな展開
- ⑤沖縄と中国の文化交流
- ⑥まとめ

【論文要旨】

民俗学において文化交流をどのように位置づけるかについて、第1に柳田國男の言説を中心に検討し、第2に、文化交流という概念のもとで、沖縄と中国の比較研究が可能かどうか考察する。

柳田國男は、民俗学の対象を民間伝承とし、文字記録に残されてきた文化とは区別した。つまり、文字に代表される学問や技芸などの文化を都市の中央文化とし、文字資料によらない民間の伝承を郷土の地方文化として対立的に捉えた。日本国内における文化の交流は、柳田によれば、流行、つまり新たな中央表層文化が、中心から周囲に時間の経過とともに空間的に広がっていき、それが郷土に定着していく過程と考えられた。都市は、新しい文化の窓口であり、新しい文化を創造する場所であり、それを発信する文化的な中心であった。学問や文芸としての外国文化は、表層文化のレベルで、まず都市に伝わる。そこで日本文化のフィルターにかけられて、都市から地方へと伝播する過程で、あるものは民俗として定着していく。柳田の「文化普及の法則」は、海外文化の都市文化への流入と都市から地方への伝播という2段階の文化の流れでとらえることができる。

沖縄と中国、あるいは日本本土との文化交流は、先史時代から歴史的事実として繰り返し行われてきた。その中で、比較的回路として儒教的制度について問題を絞ると、沖縄の父系血縁集団である門中の形成に与えた影響は大きい。近世琉球における士族層には、この父系血縁を基本とする家譜の作成、同姓不婚、異姓不養など中国的家族制度が導入されていく。しかし、同時に、一子残留による日本の家的家族制度をも取り込んで沖縄的な家族制度が整備されていったと考えられる。

儒教制度を回路とする文化交流の比較研究は、ただ単に中国から儒教的な影響が沖縄に伝播したという事実の指摘で終わるのではなく、それがどのように沖縄の中で展開し、どういう意味をもつているのかを総合的な視点で整理する必要がある。